

グアム・ミクロネシア研修を終えて

教育学研究科 1年 濱島実樹

9月6日から9月12日にかけて、グアム・ミクロネシア連邦はピス島を訪れた。本レポートでは、ピス島での人々の生活を中心に、その特徴や研修を通して考えたことなどを述べていきたい。

○) ピス島の人々の暮らし

1.地理

ミクロネシア連邦は、607の小さな島々と環礁からなる島嶼国であり、ヤップ・チューク・ポンペイ・コスラエの4つ州に分けられる。¹空の玄関口はチューク州の主島ウェノ島にあるチューク国際空港であり、日本からグアム国際空港を経由してチューク州を訪れた。ピス島は、ウェノ島から小舟で北北東に約1時間の場所にある小さな島であり、私たちがピス島に着いた際には、島の人々が暖かく迎えてくれた。なお、ウェノ島からピス島へ渡った日は台風の影響で悪天候となり、小舟には屋根がないため、雨や打ち寄せられる波に晒されながらの航海となった。

2.気候と土地

私たちがピス島に滞在した期間は2泊3日であったが、台風の影響だろうか突発的に雨が降り出すことが多かった。しかしながら、体感温度としては暖かく、話を聞く限りでは年間を通して温暖な気候のようであった。

ピス島には至る所にヤシの木があり、男の人たちがヤシの木に登ってはココナッツを取り、日常の食料としていた。ココナッツは非常に万能な植物であり、ココナッツの内側についている白い実をスプーンで削って食べたり、飲み水としたり、ココナッツミルクとして調理に使用したりと人々の生活を助けていた。ココナッツの他にも、島にはパパイヤが原生している。また、かぼちゃやさつまいも畑もあり、人々の食料となっていた。



図1 ココナッツ

3.食事

ピス島に滞在中は様々な食事をふるまってもらった。主食はコメであり、コメ以外にもカツオ料理（焼く・ココナッツミルクで煮るなど）が多くの割合を占めていた。また、ピス島では食用にブタが飼われており、さらには、イヌを食べる文化もあった。ピス島から

¹ ミクロネシア連邦政府観光局 <http://www.visit-micronesia.fm/jp/index.html>

小舟で数十分の場所にある島では、ココナツクラブという甲殻類やシャコ貝、小魚などが捕れ、人々の食生活を潤していた。食事はスプーンを使って食べる場合もあるようだが、基本は手で直接食べ、食事は一つの皿をみんなで共有していた。また、ピス島から小舟で数十分の島でココナツクラブをふるまってもらった際、私たちの残した食事は島に放置するのではなく、きちんとタッパーに詰めてピス島まで持ち帰っていた。私の推測だが、ピス島の人々には残飯を捨てるという概念はなく、食事を共有する文化から、日本人とは異なり他の人が食べた食事にも気にせず食べることができるのではないかと考えた。ちなみに食事は大変おいしく、日本人好みの味付けをしていると思った。

4.嗜好品

日本人にはあまりなじみのない物だが、ピス島の人々の嗜好品にビンロウがある。これはビンロウの実に石灰とタバコを挟み、噛んで楽しむ物だが、ビンロウを噛むと体が熱くなってくる。ピス島の人々は一日中、このビンロウを楽しんでいた。ビンロウを楽しむ人は女性もいるが男性が圧倒的に多く、ビンロウをたしなむことで大人の仲間入りを果たしている印象を受けた。



図2 ビンロウ

5.井戸水

ピス島には井戸と雨水を貯める貯水タンクがあり、人々の生活を支えている。中でも井戸水はトイレの水を流したり（いわゆるボットン式トイレに近いものか）、洗濯物を洗ったり、体を洗ったり（シャワーの代わり）といった場面で活用されていた。また、ピス島の人々はトイレ設備はあるものの、海辺や茂みなどでトイレを済ませる人が多いようだ。女性のトイレ事情がどのようなものなのか、同じ女性として気になっていたのだが、女性が井戸の側で用を足す現場に遭遇し、水で流しやすいという理由で井戸の側がトイレの一端を担っていることが判明した。なお、井戸水で水浴びをしたためかどうかは分からないが、髪の毛がきしきしと痛んでいたことから、井戸水の水質が硬水であった可能性が高い。（日本は軟水。）

6.収入源

ピス島の人々は基本無職である。男性の役割は基本小舟で漁に出たり、ヤシの木に登ってココナツを採ってくることだろうか。女性は調理など家事全般を取り仕切っていた。もしかしたら、漁で捕れた魚をウェノ島まで売りに出たりするのかもしれないが、ピス島滞在中にそのような場面には遭遇しなかった。しかしながら、ピス島では子どもたちや若

者が貝を売りにくる。または鼈甲で作ったアクセサリーを売ったり、ビンロウを売っている姿も見た。島にはビリヤードができる施設があり、そこでゲームを行う人々からお金を徴収している姿も見られた。主な収入源は以上のようなものだろうと推測される。

7.信仰

ピス島の人々はキリスト教を信仰しており、島には教会がある。ピス島滞在中には、「マリア会」という女性の信者たちの集まりが開催されていた。マリア会では、パンやジュース、ドーナツやビスケットがふるまわれ、お祈りを捧げる場にも同席した。女性の人々は、マリア会に参加するにあたり、きれいな服装に身をつつんだ正装姿であった。マリア会以外にも、若者の信者たちの集まりなど、いくつかのグループがあるようで、今回のように定期的に集会を行っているようだった。なお、ピス島では村長を決めるにあたり選挙が行われるのだが、信仰心という点も選挙に関わってくるようであった。



図3 マリア会の女性

○) ピス島滞在を振り返って 一考察

ピス島に滞在して特に印象的だったのが、ピス島の人々の家族構成と教育、そして日本との関係性である。まず、家族構成である。ピス島の人々の家族関係は非常に複雑な印象を受ける。一般的に家族と聞けば父親・母親・兄弟・姉妹そして祖父母あたりを連想するが、ピス島の場合、誰と誰が兄弟・姉妹で、子どもの父親・母親は誰なのか把握するのが難しい。夫婦が並んでいる姿を見るのも稀であった。その背景として、ピス島には私生児が多いことが挙げられるだろう。結婚していなくとも子どもがいる場合も多く、また、子どもを養子として引きとる例も珍しくないという。生みの親と育ての親が違うといっても過言ではないかもしれない。しかしながら、ピス島には島民全員で子どもたちを育てていくという雰囲気があり、生みの親と育ての親が違うからといって、そこまで悲観的に考えなくてもいいのかもしれない。実際の子どもたちの心境までは2泊3日の滞在では推し量れなかった。日本人からすれば、このような家族構成・関係性は信じられないものに映るだろう。私自身、当初は理解に苦しむ部分もあったが、ピス島の人々の暮らしに触れて、これも家族としての一つの形なんだと受け入れるに至った。ピス島における子どもの出生率・死亡率が気になるところだ。

2つ目にピス島の子どもたちの教育である。ピス島にも学校があるが、毎日学校があるわけではなく、教師の気分によって授業の有無が左右されるようだ。そのため、安定した教育は保障されていない。グアムにてお世話になったファミリーの話によると、「ピス島の教

育は信用できないから、子どもたちをグアムに連れてくるつもりだ」と言っていた。ピス島の子どもたちは学校に行く意志があり、親が子どもに「学校に行きなさい」と叱っている場面も目にした。そのため、すべての親がそのような認識であるとは限らないが、教育の必要性を親は認識していると考える。ピス島において安定した教育が行われるようになるためには、ミクロネシア政府や支援国、民間団体の支援を受けながら、教育制度の確立と教師の意識改善を図っていくことが大事だろう。

3 つめに日本との関係性である。印象的だったのが、「シャシン（写真）」「イド（井戸）」「ベンジョ（便所）」など日本語がそのまま日本語と同じ意味で使用されている点である。歴史を紐解いてみると、1920年に国際連盟の委任によってミクロネシアの日本統治が行われ、日本が第二次世界大戦に敗れるまでその統治は続いていたようだ。²残念ながら今回は訪れることができなかったが、チューク州はウェノ島には日本灯台や大砲が当時のまま残されている。ピス島も日本人による統治が行われていた可能性は高く、その影響が現在にまで続いているのかもしれない。

ピス島の人々を始め、ウェノ島の人々は私たち日本人にとっても親切であり、よく声をかけてくれた。韓国や中国のように戦時下の日本統治の影響で、両国間の関係性に慎重にならざるを得ない部分が、今もなお続く例もある中で、ミクロネシアと日本がどのようにして関係改善を図ってきたのか、気になるところだ。

おわりに

ピス島で過ごした2泊3日は、私にとって大きな糧となった。井戸水を使ったり洗濯機がなかったり、トイレがボットン式であったりと、ピス島の人々の暮らしは、どこか一昔前の日本を彷彿とさせる。日本人からすれば、なんて貧しい生活なんだろうと思ってしまう部分もあるかもしれない。しかし、ピス島の人々はおおらかで、いつも笑顔で、貧しさとは無縁のようだった。日本人がもつ感覚をピス島の人々に押しつけてはいけないし、日本人がもつ物差しでピス島の人々の生活を押し量るのは危うい気がした。ピス島の人々とのつながりを大切にしていきたい。

² ミクロネシア連邦政府観光局 <http://www.visit-micronesia.fm/jp/index.html>